



御  
集  
五

五

中村俊定文庫

文庫 18

817

5





俳諧一葉集遺語之部



古堂 庵佛号 編  
幻窓 湖中  
坎窩 久藏 校



一 格不入 格も出さず時を校く又格不入の時を校くは  
格不入の格も出さず時を校く又格不入の時を校くは  
格不入の格も出さず時を校く又格不入の時を校くは  
格不入の格も出さず時を校く又格不入の時を校くは  
格不入の格も出さず時を校く又格不入の時を校くは  
格不入の格も出さず時を校く又格不入の時を校くは  
格不入の格も出さず時を校く又格不入の時を校くは  
格不入の格も出さず時を校く又格不入の時を校くは  
格不入の格も出さず時を校く又格不入の時を校くは  
格不入の格も出さず時を校く又格不入の時を校くは

大丹内

一 名のついでに上へ細く一おろしにたてしむるものありて  
上へはたしつゝ所へおろしつゝあり

一 等敷化儀中一へはたしつゝ

一 古書撰集の中へはたしつゝ

一 系門の儀はしきふき先朝の河内へ首級末のり春の  
日積みの心とこりし中書儀大越後へ一貴白の時代へ  
をあらへ

一 物心の上へはたしつゝ一それより安備をいへら大  
山とてへ向の夢へ下へはたしつゝ一六尺とてへはたし  
ものまゝ七尺とてへはたしつゝ一それより入りつゝ  
ん心早き時へ古人の胸中をいへら

一 他法へ中人以下へはたしつゝ一俗語平語へはたしつゝ

俗語中儀もいへら一おろしにたてしむるものありて

一 一へはたしつゝ一俗語中儀もいへら一おろしにたてしむるものありて

一 一へはたしつゝ一俗語中儀もいへら一おろしにたてしむるものありて

一 一へはたしつゝ一俗語中儀もいへら一おろしにたてしむるものありて

右の儀へ祖籍口決へ

一 一へはたしつゝ一俗語中儀もいへら一おろしにたてしむるものありて

菊の... 花をぬく人... 思ひはけしめ... 昔樂を  
 豊... 花... 御... 子...  
 花... 枝... 花...  
 花... 花... 花...  
 花... 花... 花...  
 花... 花... 花...  
 花... 花... 花...  
 花... 花... 花...  
 花... 花... 花...

孝外と有る花の記

花... 花... 花...  
 花... 花... 花...  
 花... 花... 花...  
 花... 花... 花...  
 花... 花... 花...  
 花... 花... 花...  
 花... 花... 花...  
 花... 花... 花...  
 花... 花... 花...  
 花... 花... 花...

山甲と菊の花

菊... 山... 菊... 山... 菊... 山...

く... 梅の葉... 葉の葉... 葉の葉...  
 ... 葉の葉... 葉の葉... 葉の葉...  
 ... 葉の葉... 葉の葉... 葉の葉...  
 ... 葉の葉... 葉の葉... 葉の葉...  
 ... 葉の葉... 葉の葉... 葉の葉...

一 菊尚白... 菊尚白... 菊尚白...  
 ... 菊尚白... 菊尚白... 菊尚白...  
 ... 菊尚白... 菊尚白... 菊尚白...  
 ... 菊尚白... 菊尚白... 菊尚白...  
 ... 菊尚白... 菊尚白... 菊尚白...

おかし... おかし... おかし...  
 ... おかし... おかし... おかし...  
 ... おかし... おかし... おかし...  
 ... おかし... おかし... おかし...

一 今事貞草の古式を... 今事貞草の古式を... 今事貞草の古式を...  
 ... 今事貞草の古式を... 今事貞草の古式を... 今事貞草の古式を...  
 ... 今事貞草の古式を... 今事貞草の古式を... 今事貞草の古式を...  
 ... 今事貞草の古式を... 今事貞草の古式を... 今事貞草の古式を...

扱五々條

- 一 月花 一句
- 一 出合 巻道
- 一 伝丹 持彦
- 一 小 沐剛

一 止

止

芭蕉庵桃青判

一 諸礼停止

一 出合を近但あり先

一 一句一直 五月花一句

右三ヶ條書式也

芭蕉庵桃青書之

行脚掟

一 大なる山に上りて山頂にありて再び下りて山麓に石上りて臥し  
ててありておぼろしく思ふべし

一 海舟に上りて海を渡る時舟中の物に念を遣はさずして舟に  
身を任せしむべし

一 君父の難言ありて聞きし門外にありて遊むべし何れも夫をいしむる  
見ゆべき情ありしに

一 衣袋に金貨ありてしりしに金貨をいしむるは  
程ありしに

一 魚多敷の肉を好む者ありしに魚を食ひて味をたしめける人  
何事にもこれ多敷のものに菜根を食へば百事をたしめける法  
をいしむべし

一 人の心は先きありてしりしに心をいしむるは  
心をいしむる法ありしに心をいしむるは

一 多敷の喰物の境ありしに多敷の命をおこししに  
中道ありしに

一 加へしに多敷の命ありしに一枝の枯杖をこししに

一舟にのりて飲つるに饗應するも固辞しかくも微醺  
 ありと止りしに私におもむに此林もも祀果の戒を予を醜を  
 用するに誠を少く先へは酒をききうの刑を情をいふなり  
 一船跡系代もさすくふなり  
 一舟の短をも岸をこぎ長を那うしおのれ人も誰か地の  
 深らるる甚しや

一御話しかれ話すくくは難話おれは居候くくは苦を善し  
 一女性の休友もさすくふなり師も弟子もくくはぬくくはり  
 一はをさすくくは疾をい人もさすくくは傳へくくは地を男女の花ハ圃をさす  
 一るさすくくは流流すれは心敷くくはくくは主一客道くくは  
 一さすくくは能おのれも有くくは  
 一まゆ物ハ一枝一草くくはくくはくくは山江は海もくくは

はしめしや

一山川四流きくくは舟入くくは新くくは私の心をけくくはされ  
 一一字の師息くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは  
 一さる人の心とあるくくはくくは人さくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは  
 一右一板のさくくはおろさくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは  
 一くくはくくはれ移のくくはくくは人の事の奴はくくはくくはくくはくくはくくはくくは  
 一人くくはくくはくくは

一くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは  
 一くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは  
 一くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは  
 一くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

右の海くくは系門の杉脚ハ情をくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは  
 くくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくはくくは

いれぬ侍もさそききとていふおれいふやあ  
百人がふるまふ色も藤ののちのちとさくらんか  
子羊改とさけく物肉を食ひ焼くべしおれいふかき

一 蓬 木 子 び ち 相 伊 勢 北 ち づ 俊 翁

蓬 木 子 び ち 相 伊 勢 北 ち づ 俊 翁  
着 涼 川 上 木 子 び ち 相 伊 勢 北 ち づ 俊 翁  
ふやまのよもぎとて又ふよの伊勢北ちづ俊翁の  
式のとてあつむれ代もいふやき俊のあつむれは祖神の  
くや胸中もさくらんかきとていふおれいふやあ  
はらめあつむれ今日神のあつむれいふおれいふやあ  
かくは結和南の河を使ひ物の一文字を給ひ清浄のさくらんか  
とてあつむれとていふおれいふやあ

一 か じ さ ね の ね は 花 子 づ 藤 子 づ 翁

か じ さ ね の ね は 花 子 づ 藤 子 づ 翁  
依 尺 の 他 志 留 の 輪 け っ せ 角 づ ち づ 俊 翁  
あつむれいふおれいふやあ又てはつむれいふおれいふやあ  
いふおれいふやあ又てはつむれいふおれいふやあ  
いふおれいふやあ又てはつむれいふおれいふやあ  
いふおれいふやあ又てはつむれいふおれいふやあ  
いふおれいふやあ又てはつむれいふおれいふやあ  
いふおれいふやあ又てはつむれいふおれいふやあ  
いふおれいふやあ又てはつむれいふおれいふやあ  
いふおれいふやあ又てはつむれいふおれいふやあ



白  
あやのこころは  
白糸の切字のふくふく  
あやの只服赤の言糸  
こころは  
あやの只服赤の言糸  
こころは

一  
こころは

あやの只服赤の言糸  
こころは  
あやの只服赤の言糸  
こころは  
あやの只服赤の言糸  
こころは

あやの只服赤の言糸  
こころは  
あやの只服赤の言糸  
こころは  
あやの只服赤の言糸  
こころは

一 若くは... 猫の意 故人

若くは... 俗情... 人の身... 若くは... 故人

一 本... 若くは... 故人

本... 若くは... 故人

本... 若くは... 故人

一 若くは... 故人

一 若くは... 故人

若くは... 故人

若くは... 故人

若くは... 故人

一 若くは... 故人

若くは... 故人

少  
一 おく楳 くのそむり 郭 乙 野水  
一 楳の楳の時を本を此の河の舟を楳するに  
よも同赤し入集りてし楳白の舟を楳するに  
本を阿の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
は楳楳の楳白の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
そむりてし楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに

一 若き本を楳して白楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
白楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに

昔の舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに

一 楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに

一 舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに  
舟を楳するに楳の舟を楳するに楳の舟を楳するに



付 紙讀の初ハ之盡さんといふ沙日きくかれば定家の心  
なノきしとぬおのりもとくしつぬ信とてや  
源詳ある事也

一 ものつひをぬのふしつ花さく 七末

それハ猿の二三季以ておのりし菊曰く自ら芳人こそよし一高  
年中のつひとてさな杜玉の枝も芳時の節一あひそま  
さよのめより枝ハよりやも花の山とて成はれしつと  
あしつに魂をいへんれ又ハ世角さくさくさくめあよ  
年をともとられて芳かき句とてさくしつとてつひの山古  
えんとくしつとてさくさくさくさくさくさくさくさく  
くけさくさく今一も季あさくさくさくさくさくさくさく  
きくさくさくさく

一 病の初ハ夜中より首くぬく梅のよ 菊

泉郎、あえおのり中つひ

秋の櫻の対ひら一句入集すしつとてさくさくさくさく  
とも小瓶のつひつひつひつひつひつひつひつひつひつ  
かきつとてさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
あしつとてさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
つひつとてさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
梅の初ハ夜中より首くぬく梅のよ 菊

一 口をさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく 七末

菊の初ハ夜中より首くぬく梅のよ 菊

一 口をさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく 七末

いふこといふ必さるやと本を名目と云ふこと山を名目と云ふこと  
若し又いふこと神宮と云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
のまゝと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
神の句と云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
古本と云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
かゝる類々の書と云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
おぼしめしと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
いづくから云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと

本草

菊類はのち藤類と人々の教訓の句をすまひて今日より菊類はのち  
一字のち藤類を加ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
いふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
物と云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
物といふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十

いふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
凡此下と云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
いふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
いふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
いふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
いふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
いふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと  
いふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふことと云ふこと









付は... くだる... 奇異... け... け... け...  
お... け... け... け... け... け...  
け... け... け... け... け... け...

一 楊... け... け... け... け...  
これら... 楊... 楊... 楊... 楊...  
け... 楊... 楊... 楊... 楊...

一 舟... け... け... け... け...  
舟... 舟... 舟... 舟... 舟...  
舟... 舟... 舟... 舟... 舟...

一 張... け... け... け... け...  
張... 張... 張... 張... 張...  
張... 張... 張... 張... 張...

一 一... け... け... け... け...  
一... 一... 一... 一... 一...  
一... 一... 一... 一... 一...

一 一... け... け... け... け...  
一... 一... 一... 一... 一...  
一... 一... 一... 一... 一...

此の... 時を来... 初の... 句を... けい... けい... けい... けい...

くろ... 櫓の... 入... 箱

此の... 時を来... 初の... 句を... けい... けい... けい... けい...

後... 位... 七... 七...

好春... 上... 初の... 句を... けい... けい... けい... けい...

お... と... 盛す

ふ... 中... 秋... 七...

此の... 時を来... 初の... 句を... けい... けい... けい... けい... けい... けい... けい... けい...

去りていづる本に其時を有難く思ひて其の定む  
と上り侍りしに只の日のやけに其をいひて人のいふ  
と信をいふれ侍りしに只の日のやけに其をいひて人のいふ  
たんに其の指所の如くして其のいふをいひて人のいふ

一 かなみ 子 愛を志す 信 去本  
は 草生をいひていづるに依りて 信 去本

一 菊のうらみ 世にうらみは白をきりて其の化をいひ  
此の甘味をいふれは白をきりて其の化をいひて人のいふ  
赤人たるに其のいふをいひて其の化をいひて人のいふ

一 菊のうらみ 世にうらみは白をきりて其の化をいひ  
菊のうらみ 世にうらみは白をきりて其の化をいひて人のいふ  
菊のうらみ 世にうらみは白をきりて其の化をいひて人のいふ

一 此のうらみ 世にうらみは白をきりて其の化をいひて人のいふ

一 菊のうらみ 世にうらみは白をきりて其の化をいひて人のいふ

一 菊のうらみ 世にうらみは白をきりて其の化をいひて人のいふ

一 菊のうらみ 世にうらみは白をきりて其の化をいひて人のいふ

一 菊のうらみ 世にうらみは白をきりて其の化をいひて人のいふ

一 菊のうらみ 世にうらみは白をきりて其の化をいひて人のいふ





一 卯七 主に子官割をいなり用ひゆやと申さけし中野 漢書  
 三 卯の會子官割の句やと申す言ふ句申す有ゆれ  
 卯一 卯の句をいなり用ひゆと申す言ふ句申す有ゆれ  
 卯二 卯の句をいなり用ひゆと申す言ふ句申す有ゆれ  
 卯三 卯の句をいなり用ひゆと申す言ふ句申す有ゆれ  
 卯四 卯の句をいなり用ひゆと申す言ふ句申す有ゆれ  
 卯五 卯の句をいなり用ひゆと申す言ふ句申す有ゆれ  
 卯六 卯の句をいなり用ひゆと申す言ふ句申す有ゆれ  
 卯七 卯の句をいなり用ひゆと申す言ふ句申す有ゆれ  
 卯八 卯の句をいなり用ひゆと申す言ふ句申す有ゆれ  
 卯九 卯の句をいなり用ひゆと申す言ふ句申す有ゆれ  
 卯十 卯の句をいなり用ひゆと申す言ふ句申す有ゆれ

西野の海の中へいなり用ひゆと申す言ふ句申す有ゆれ  
 卯一 卯の句をいなり用ひゆと申す言ふ句申す有ゆれ  
 卯二 卯の句をいなり用ひゆと申す言ふ句申す有ゆれ  
 卯三 卯の句をいなり用ひゆと申す言ふ句申す有ゆれ  
 卯四 卯の句をいなり用ひゆと申す言ふ句申す有ゆれ  
 卯五 卯の句をいなり用ひゆと申す言ふ句申す有ゆれ  
 卯六 卯の句をいなり用ひゆと申す言ふ句申す有ゆれ  
 卯七 卯の句をいなり用ひゆと申す言ふ句申す有ゆれ  
 卯八 卯の句をいなり用ひゆと申す言ふ句申す有ゆれ  
 卯九 卯の句をいなり用ひゆと申す言ふ句申す有ゆれ  
 卯十 卯の句をいなり用ひゆと申す言ふ句申す有ゆれ





あつていふにいふに物三つ集つて物つたこといふに  
いふにいふに

一 海老と蟹のいふに今もものさしをいふに  
是にいふに

一 吉本に沙回句より自筆といふに  
いふにいふに

一 他人のいふに物つたこといふに  
いふにいふに

一 菊の昔のいふにいふに  
いふにいふに

一 今に付物をつとす中法に心付をいふに  
今に付つて御音聲位  
を以付つていふに  
吉本に支考おし  
いふに

いふにいふに沙の海をいふに  
他に押して

赤人けあをいふにいふに  
史部

いふにいふにいふに  
吉本

沙回つていふにいふに  
吉本に二十橋をいふに

いふにいふにいふに  
いふにいふに

いふにいふにいふに  
いふにいふに

いふにいふにいふに  
いふにいふに

いふにいふにいふに  
いふにいふに

少くも、所けき、たゞ、たゞのまゝにちて、あつたは、  
多し、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、た、  
おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、おと、  
後、後、後、後、後、後、後、後、後、後、後、後、

一 手紙に、きんぐくあ、六、抄、破、り

い、の、ら、く、れ、き、撫、集、の、さ、り

初、ハ、お、分、の、真、保、ハ、し、ひ、と、付、る、着、目、を、西、行、破、因、  
た、の、境、界、と、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、さ、り、  
只、使、し、せ、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、

一 數、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、

内、苑、活、り、と、よ、ぶ、あ、り、汗

一 翁、曰、く、る、語、り、傳、は、る、ん、と、い、ひ

一 翁曰、予、の、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、

多、數、の、お、し、お、お、お、お、お、お、お、お、

一 翁曰、附、物、を、し、け、く、た、當、時、あ、つ、た、り、附、地、を、付、く、

く、い、を、さ、ん、さ、り、付、く、ハ、又、さ、れ、

一 翁曰、一、も、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、

一 翁曰、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、

一 翁曰、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、

一 翁曰、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、

一 翁曰、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、

一 翁曰、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、

一 翁曰、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、

一 翁曰、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、

他... 七... 又... 一... 長... 短... 古... 今... 集...

一... 長... 短... 古... 今... 集... 三十一... 字... 長... 短... 古... 今... 集...

一... 長... 短... 古... 今... 集... 三十一... 字... 長... 短... 古... 今... 集... 三十一... 字... 長... 短... 古... 今... 集...

定や、此も佳し、と、費之、窮恒、と、いふ、の、いふ、いふ、

一、定や、此も佳し、と、いふ、の、いふ、いふ、いふ、

一、定や、此も佳し、と、いふ、の、いふ、いふ、いふ、

一、定や、此も佳し、と、いふ、の、いふ、いふ、いふ、

一、定や、此も佳し、と、いふ、の、いふ、いふ、いふ、

一、定や、此も佳し、と、いふ、の、いふ、いふ、いふ、

一、定や、此も佳し、と、いふ、の、いふ、いふ、いふ、

一、定や、此も佳し、と、いふ、の、いふ、いふ、いふ、

一本節、同中、此の、余人の、詩あり、や、菊、田、面、形、と、強、念、の、右、大、片、あり、

あり、

一本、早、の、古、今、集、ハ、と、は、あ、す、と、古、西、が、あ、り、や、菊、田、面、定、家、ハ、い、か、の、ち、り、西、即、然、と、い、ふ、の、ち、ハ、定、家、郷、の、深、淵、多、く、い、ふ、い、ふ、

一、或、人、同、古、今、集、の、序、に、古、義、を、説、季、吟、能、詠、す、と、い、ふ、我、を、い、ふ、い、ふ、

一、或、人、同、古、今、集、の、序、に、古、義、を、説、季、吟、能、詠、す、と、い、ふ、我、を、い、ふ、い、ふ、

一、或、人、同、古、今、集、の、序、に、古、義、を、説、季、吟、能、詠、す、と、い、ふ、我、を、い、ふ、い、ふ、

一、或、人、同、古、今、集、の、序、に、古、義、を、説、季、吟、能、詠、す、と、い、ふ、我、を、い、ふ、い、ふ、

一、或、人、同、古、今、集、の、序、に、古、義、を、説、季、吟、能、詠、す、と、い、ふ、我、を、い、ふ、い、ふ、

一、或、人、同、古、今、集、の、序、に、古、義、を、説、季、吟、能、詠、す、と、い、ふ、我、を、い、ふ、い、ふ、

一、或、人、同、古、今、集、の、序、に、古、義、を、説、季、吟、能、詠、す、と、い、ふ、我、を、い、ふ、い、ふ、

一、或、人、同、古、今、集、の、序、に、古、義、を、説、季、吟、能、詠、す、と、い、ふ、我、を、い、ふ、い、ふ、

一、或、人、同、古、今、集、の、序、に、古、義、を、説、季、吟、能、詠、す、と、い、ふ、我、を、い、ふ、い、ふ、

一、或、人、同、古、今、集、の、序、に、古、義、を、説、季、吟、能、詠、す、と、い、ふ、我、を、い、ふ、い、ふ、

一、或、人、同、古、今、集、の、序、に、古、義、を、説、季、吟、能、詠、す、と、い、ふ、我、を、い、ふ、い、ふ、

一、或、人、同、古、今、集、の、序、に、古、義、を、説、季、吟、能、詠、す、と、い、ふ、我、を、い、ふ、い、ふ、

一素 古今の人をよむり 宗系能くして備座あることよむ  
 人形 宗系八訪の三百餘のまゝ 存者の体裁抄のつゞき  
 訪 古今の體ありし 訪の體又傳ふりてまゝ 一量 古  
 是を用ひて 物を廢さんや 古の體に 尺九ハ昔  
 宗系能くよむる 八訪の體を 一尺九ハ昔 古今  
 集ハし 傳ふ 尺九ハ昔の體ありし 尺九ハ昔 古今  
 一尺九ハ昔 宗系八訪材をよむりし 手抄載の 一尺九ハ昔  
 一尺九ハ昔 尺九ハ昔の體ありし 尺九ハ昔 古今  
 尺九ハ昔 尺九ハ昔の體ありし 尺九ハ昔 古今  
 一尺九ハ昔 尺九ハ昔の體ありし 尺九ハ昔 古今

一卯 七二と上海の尺 一尺九ハ昔の體ありし 尺九ハ昔 古今

一尺九ハ昔 尺九ハ昔の體ありし 尺九ハ昔 古今  
 一尺九ハ昔 尺九ハ昔の體ありし 尺九ハ昔 古今  
 一尺九ハ昔 尺九ハ昔の體ありし 尺九ハ昔 古今  
 一尺九ハ昔 尺九ハ昔の體ありし 尺九ハ昔 古今  
 一尺九ハ昔 尺九ハ昔の體ありし 尺九ハ昔 古今  
 一尺九ハ昔 尺九ハ昔の體ありし 尺九ハ昔 古今  
 一尺九ハ昔 尺九ハ昔の體ありし 尺九ハ昔 古今  
 一尺九ハ昔 尺九ハ昔の體ありし 尺九ハ昔 古今  
 一尺九ハ昔 尺九ハ昔の體ありし 尺九ハ昔 古今  
 一尺九ハ昔 尺九ハ昔の體ありし 尺九ハ昔 古今

一尺九ハ昔 尺九ハ昔の體ありし 尺九ハ昔 古今  
 一尺九ハ昔 尺九ハ昔の體ありし 尺九ハ昔 古今  
 一尺九ハ昔 尺九ハ昔の體ありし 尺九ハ昔 古今  
 一尺九ハ昔 尺九ハ昔の體ありし 尺九ハ昔 古今  
 一尺九ハ昔 尺九ハ昔の體ありし 尺九ハ昔 古今  
 一尺九ハ昔 尺九ハ昔の體ありし 尺九ハ昔 古今  
 一尺九ハ昔 尺九ハ昔の體ありし 尺九ハ昔 古今  
 一尺九ハ昔 尺九ハ昔の體ありし 尺九ハ昔 古今  
 一尺九ハ昔 尺九ハ昔の體ありし 尺九ハ昔 古今  
 一尺九ハ昔 尺九ハ昔の體ありし 尺九ハ昔 古今

此の... 文の記... 備... 先哲の文を  
... 文を... 記... 備... 先哲の文を

一 草之山... 青... 白... 雲... 霞... 霧... 雲... 霧... 雲... 霧...  
一 雲... 霧... 雲... 霧... 雲... 霧... 雲... 霧... 雲... 霧...  
一 雲... 霧... 雲... 霧... 雲... 霧... 雲... 霧... 雲... 霧...  
一 雲... 霧... 雲... 霧... 雲... 霧... 雲... 霧... 雲... 霧...  
一 雲... 霧... 雲... 霧... 雲... 霧... 雲... 霧... 雲... 霧...

一 式ハ古式ナリ 倣ク

一 古... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣...  
一 古... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣...

一 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣...  
一 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣...

一 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣...  
一 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣... 倣...







又く其言をくもし何故か其言人何れも其言をくもし何故か  
 何れも人何れも二語に心付く事心所意の語に遊びまじり  
 一泉の鬼覺赤武行の序に和句後夜子翁を初中し翁は  
 先よのむ村の本々の句をゆめ行し夜子翁何れも何れも  
 白ゆり

翁何れも何れの本々の何れも木立 鬼覺

と能き翁の志言の語何れも何れも何れも何れも何れも何れも  
 と何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも

と何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも  
 と何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも

と何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも  
 と何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも

何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも  
 何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも

何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも

何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも  
 何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも

何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも

何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも  
 何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも  
 何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも  
 何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも何れも

よきくおゆはくめくこく

いけけのこを起しつる文集もていさきもいさき  
白くあま味もていさきの白ゆかきつるあつあつ  
起り是は坊もあつあつはけりはけりてあつあつ  
とていさきもあつあつていさきもあつあつ

佛 籍りよんとおゆのよく

着日は何もあつあつていさきもあつあつ  
あつあつていさきもあつあつていさきもあつあつ  
あつあつていさきもあつあつていさきもあつあつ  
あつあつていさきもあつあつていさきもあつあつ  
あつあつていさきもあつあつていさきもあつあつ  
あつあつていさきもあつあつていさきもあつあつ  
あつあつていさきもあつあつていさきもあつあつ  
あつあつていさきもあつあつていさきもあつあつ

このきりもあつあつていさきもあつあつ  
あつあつていさきもあつあつていさきもあつあつ  
あつあつていさきもあつあつていさきもあつあつ  
あつあつていさきもあつあつていさきもあつあつ  
あつあつていさきもあつあつていさきもあつあつ  
あつあつていさきもあつあつていさきもあつあつ  
あつあつていさきもあつあつていさきもあつあつ  
あつあつていさきもあつあつていさきもあつあつ

砂きりもあつあつの中いさきもあつあつ

いさきもあつあつの中いさきもあつあつ

あつあつていさきもあつあつていさきもあつあつ  
あつあつていさきもあつあつていさきもあつあつ  
あつあつていさきもあつあつていさきもあつあつ  
あつあつていさきもあつあつていさきもあつあつ  
あつあつていさきもあつあつていさきもあつあつ  
あつあつていさきもあつあつていさきもあつあつ  
あつあつていさきもあつあつていさきもあつあつ  
あつあつていさきもあつあつていさきもあつあつ





以物をもつた言... 松印

とらふつとせし... 松印... 是れ夫人の命... 松印

かきへとの名... 松印... 及へる... 松印





世に... 人の... 古の... 人の... 古の... 人の... 古の...  
 一季... 成... 概... 一... 季... 成... 概... 一... 季... 成... 概...  
 決... 兄... 卿... の... と... び... 多... 一... の... と... び... 多...  
 此... 集... の... の... 尺... の... と... び... 多... 一... の... と... び... 多...  
 減... の... 尺... の... と... び... 多... 一... の... と... び... 多...

一秋の切へ今... 傳ふ

一秋の切へ今... 傳ふ  
 一秋の切へ今... 傳ふ

一秋の切へ今... 傳ふ

一秋の切へ今... 傳ふ  
 一秋の切へ今... 傳ふ  
 一秋の切へ今... 傳ふ







一 龍高千小切主の口大根引 二 龍

作の口大根引ハ野千文行と大根川に下りてとて  
あまきりまくとおれしとて

一 龍曰はくきよしきまのハ龍取れりて是を以て甲のまきり  
千七七の龍をとり命の龍点とて千の龍とて又志のま  
家と名をかりしとてしを以て本式とてしとてしは  
天竺の妻二人持さるるのゆへ一人ハ若く一人ハ年老く我  
時老と妻の方の持しに老女の心をかねて是を娶ふゆへ  
又時の時とて女房の持しゆきし又女とてねと白雲をぬ  
く心とてあまきりまくとおれしとてしを以て本式とてしと  
是とて相とて及び本式とてしとてしを以て本式とてしとてし  
もあまきりまくとおれしとてしを以て本式とてしとてし

よけれ玉子曰為富不仁者不富よゆへは心を能く心は

一 龍曰はくきよしきまのハ龍取れりて是を以て甲のまきり

一 人の心とて看くゆへ

一 香門の人ハ香徒三石古斗塔とてしとてしを以て本式とてしとてし

一 龍曰はくきよしきまのハ龍取れりて是を以て甲のまきり

一 龍曰はくきよしきまのハ龍取れりて是を以て甲のまきり

一 龍曰はくきよしきまのハ龍取れりて是を以て甲のまきり

一 龍曰はくきよしきまのハ龍取れりて是を以て甲のまきり

一 龍曰はくきよしきまのハ龍取れりて是を以て甲のまきり

一 龍曰はくきよしきまのハ龍取れりて是を以て甲のまきり

一 龍曰はくきよしきまのハ龍取れりて是を以て甲のまきり

一 龍曰はくきよしきまのハ龍取れりて是を以て甲のまきり

一 龍曰はくきよしきまのハ龍取れりて是を以て甲のまきり

一 龍曰はくきよしきまのハ龍取れりて是を以て甲のまきり









少くも打退きぬて置くまゝにうらうらと一毛も人の心を  
そらすの許さず薬の毒も是れ風程の如く子もえくゝ薬を飲  
まぬとよき人の心を毒も薬も毒も何れかかくのよゝ一は指し  
まゝに治すはしるも是れよゝのよゝ一よゝの腹と一は治す  
の由果是なり

すくちや指すまゝなる様。 函

と云ふ全く仕娘のむくしる由果是なり一様の坂面より一は  
おもふに一は一は治すまゝに一は治すまゝに一は治すまゝに  
上りて仕娘のやゆ日毎のしるまゝに一は治すまゝに一は治すま  
おそくくは治すまゝに一は治すまゝに一は治すまゝに一は治すま  
まゝに治すまゝに一は治すまゝに一は治すまゝに一は治すまゝに  
と云ふ中仕娘のまゝに一は治すまゝに一は治すまゝに一は治すま

病を決定する時

人先を醫者たは捨やとるく

と云ふは時々の病を治すは捨やとるく一は治すまゝに一は治すま  
は底はむくしるめり一は治すまゝに一は治すまゝに一は治すま  
むくしるめり一は治すまゝに一は治すまゝに一は治すまゝに  
一は治すまゝに一は治すまゝに一は治すまゝに一は治すまゝに  
人の及ぶに一は治すまゝに一は治すまゝに一は治すまゝに

一病は治すまゝに一は治すまゝに一は治すまゝに一は治すまゝに

一 醫者 醫者 一 大 大 一 子 子

病は治すまゝに一は治すまゝに一は治すまゝに一は治すまゝに



多しあや多病をりくく一竹了くろ源よの情もれとて火の  
源みハ一友一友と巻しきりし

一 浮らるるあひまきりき本化の二を何りき賦後門等のお草集能の  
しとてく初四のみりきりし一 又よし十季ハ二のいし

一 定てくあき集能の記志本化的中の二きいし

一 白ハ初くまきりし一 一書ハ初はくきりし

一 一書ハ初まきりし一 一書ハ初はくきりし

一 秋ハ初ハ初きりし一 一書ハ初はくきりし

一 一月ハ初ハ初きりし一 一書ハ初はくきりし

一 秋の白ハ初ハ初きりし一 一書ハ初はくきりし

一 一書ハ初ハ初きりし一 一書ハ初はくきりし

一 一書ハ初ハ初きりし一 一書ハ初はくきりし

一 一書ハ初ハ初きりし一 一書ハ初はくきりし

一 一書ハ初ハ初きりし一 一書ハ初はくきりし

一 一書ハ初ハ初きりし一 一書ハ初はくきりし



一 女有云、為の難法、予、修、其、此、所、の、思、を、見、お、の、り、も、と、舟、の、  
 の、を、こ、を、こ、い、ら、予、漕、を、も、ち、し、さ、し、か、り、ま、す、の、こ、は、い、た、め、れ、  
 ハ、予、の、乳、を、こ、い、ら、漕、を、お、座、を、ゆ、め、ゆ、め、ゆ、め、ゆ、め、ゆ、め、ゆ、  
 ま、い、思、を、も、ち、め、り、の、難、法、予、も、と、い、ひ、て、乳、を、さ、し、入、こ、こ、こ、  
 み、こ、い、ま、さ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 と、い、ま、の、か、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、  
 り、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 と、い、ま、ま、

一 昔、よ、ま、あ、た、ハ、舟、ノ、乳、を、い、め、い、  
 と、い、れ、し、の、三、才、圖、彙、の、後、を、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、  
 昔、の、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、  
 め、一、菊、尾、張、り、

また、の、ゆ、は、け、い、く、お、お、け、ま、

一 人の、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、  
 け、一、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、

一 車、膚、を、お、日、能、然、と、何、務、お、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、  
 と、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、

一 本、根、を、お、日、能、然、と、何、務、お、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、  
 お、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、

一 一、お、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、  
 と、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、

一 予、の、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、  
 予、も、信、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、

忠廟の御子人の子孫  
とて知らるる又貞宗の御子武の画像と高麗子孫を  
乞ふる事ありき事ありき事ありきの御子孫を  
あひやうにさす事ありき事ありき事ありき事ありき

三石の御子の天子をうけえし道をも万中取らば  
はげしく遊んどの御子孫をいかにさすべし

月夜の星やあけとけりし

一 花の御方と合ふは御子孫をいかにさすべし  
いくはとめやあけとけりし御子孫をいかにさすべし  
五十年とてあけとけりし御子孫をいかにさすべし  
一 史邦と御子の御子孫をいかにさすべし  
五十年とてあけとけりし御子孫をいかにさすべし

1に

上いや下を御子孫をいかにさすべし 史邦

そ御子の御子孫をいかにさすべし  
物事と御子の御子孫をいかにさすべし

二三の御子孫をいかにさすべし  
御子孫をいかにさすべし

御子孫をいかにさすべし

御子孫をいかにさすべし  
御子孫をいかにさすべし  
御子孫をいかにさすべし

一海

一海

一翁ん此子考て曰一考のしち考の述の三五ゆらん人の此考  
十月子及ふ人の名人し

一海六の流の和及ふ才を以某といふもの本に考と他諸人し  
と定むを射

初人此の御子にける細代うれ

一海六の流の和及ふ才を以某といふもの本に考と他諸人し  
と定むを射

一海六の流の和及ふ才を以某といふもの本に考と他諸人し  
と定むを射

一海六の流の和及ふ才を以某といふもの本に考と他諸人し  
と定むを射

一海六の流の和及ふ才を以某といふもの本に考と他諸人し  
と定むを射

人あり此に仲するゆき吐く人 枕様  
風を舟にきり 成 翁

一海六の流の和及ふ才を以某といふもの本に考と他諸人し  
と定むを射

次子の流れ舟にきり 成

一海六の流の和及ふ才を以某といふもの本に考と他諸人し  
と定むを射

一海

一海



余一人にしかるべきものなりとも  
 主君のその事よとて人々を以て  
 何の事かといふに余は之を以て  
 耳を以て之を聞きしに余は之を  
 聞かざるも亦た之を聞きしに余は  
 聞かざるも亦た之を聞きしに余は  
 聞かざるも亦た之を聞きしに余は  
 聞かざるも亦た之を聞きしに余は  
 聞かざるも亦た之を聞きしに余は

一と云ふも、いふは、一と云ふは、  
 誠ともいふは、誠ともいふは、  
 誠ともいふは、誠ともいふは、  
 誠ともいふは、誠ともいふは、  
 誠ともいふは、誠ともいふは、  
 誠ともいふは、誠ともいふは、

先達し、あつ、まじ、これ代々、  
 天おま、ま、ま、人、の、服、を、待、た、す、  
 一、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 一、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 一、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 一、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 一、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

一、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 一、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 一、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 一、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 一、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 一、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 一、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 一、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 一、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 一、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 一、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 一、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 一、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、





一 此の文章の體裁 代々の戸々を傳へて人傳ひされ何の  
そやけを叫びし私手是をたれへてつりきあひて今  
のハ世にまゝとて一 天のたつとて一 但志の門外  
其の體裁に使用 してきあひて其の門外は  
ハト手へて一 定り

一 云々之のよき体可一 尺の目おしより二の目され八用のさし  
のよき之の詞をたゞし集めて玉を海をつつてさし  
け誠におもひつゝ今思ふべき意あり大和の  
あふけのよきみ宗師宗師の行中一 白くして  
あふけのよきみ宗師宗師の行中一 白くして  
あふけのよきみ宗師宗師の行中一 白くして  
あふけのよきみ宗師宗師の行中一 白くして

のみしつゝ一 志すも及んて新式も  
一 旅のり成備すも菊田車あり旅のり  
一 多くゆゑに八種新式を志す  
一 今旅志新あり一 又一つは  
一 菊田車はさす一 すら一 ぬ人  
一 菊田車はさす一 すら一 ぬ人  
一 菊田車はさす一 すら一 ぬ人  
一 菊田車はさす一 すら一 ぬ人

集りてはたゞの集りてのみなれども他老の味くぬれり  
たゞの集り

一 蜀曰地の白くく先余白く余白等類すては一は地の  
くく地くく白くく地くく白くく地くく白くく地くく白くく  
白くく引くく趣命を考ふる所の白くく地くく白くく地くく  
白くく大や地くく地くく地くく地くく地くく地くく地くく  
又ぬ方ちくく地くく地くく地くく地くく地くく地くく地くく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くく地くく白くく地の地くく地くく地くく地くく地くく地くく  
又

まゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

とみちあーくまー河村とん

此余はも古くも色もすうらら他老ももくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
十月及びいきり河村あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
はゆの余も思ひ地くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

一 蜀曰地の白くく地くく地くく地くく地くく地くく地くく地くく地くく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
なる切字を加へて付句の姿ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ  
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

以有久云其也...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

一又章のりり局曰...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

地の洞乱...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

一云若之...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

新表の肉を廻し御徳も鬼女にうつりし就命に苦み  
其外人を叙しきるまゝなる新八用指す一頁約二五  
三二の頁なり

一古芳五の河内徳の叙段を三三の頁の表の内につく  
る好む旨のりくし又おのりくしは叙段を三三の頁  
とくし人のよりきくしは然し新のきくしは新の表  
くしはくしは御徳にさくしは御徳にさくしは御徳に  
すの月指す一御徳のりくしは御徳のりくしは御徳のりくし

一古芳五をきくしは御徳にさくしは御徳にさくしは御徳に  
御徳にさくしは御徳にさくしは御徳にさくしは御徳に  
御徳にさくしは御徳にさくしは御徳にさくしは御徳に  
御徳にさくしは御徳にさくしは御徳にさくしは御徳に  
御徳にさくしは御徳にさくしは御徳にさくしは御徳に

きくしは御徳にさくしは御徳にさくしは御徳にさくしは御徳に  
御徳にさくしは御徳にさくしは御徳にさくしは御徳に  
御徳にさくしは御徳にさくしは御徳にさくしは御徳に  
御徳にさくしは御徳にさくしは御徳にさくしは御徳に  
御徳にさくしは御徳にさくしは御徳にさくしは御徳に

一古芳古今の人名おもしろく御徳にさくしは御徳にさくしは御徳に  
御徳にさくしは御徳にさくしは御徳にさくしは御徳に  
御徳にさくしは御徳にさくしは御徳にさくしは御徳に  
御徳にさくしは御徳にさくしは御徳にさくしは御徳に  
御徳にさくしは御徳にさくしは御徳にさくしは御徳に

一古芳徳御徳にさくしは御徳にさくしは御徳にさくしは御徳に  
御徳にさくしは御徳にさくしは御徳にさくしは御徳に  
御徳にさくしは御徳にさくしは御徳にさくしは御徳に  
御徳にさくしは御徳にさくしは御徳にさくしは御徳に  
御徳にさくしは御徳にさくしは御徳にさくしは御徳に

一編目も一頁他三十五の頁に一頁と注し御徳にさくしは御徳に  
御徳にさくしは御徳にさくしは御徳にさくしは御徳に  
御徳にさくしは御徳にさくしは御徳にさくしは御徳に  
御徳にさくしは御徳にさくしは御徳にさくしは御徳に  
御徳にさくしは御徳にさくしは御徳にさくしは御徳に

一箱曰散りのひにすまをの取られぬ初心は走らさす一八雲抄抄  
しるしは伝わり白紙と書く位より一ひをすしと考ふる  
と付る去芳を箱に装束の散りかたをみれば一時代より  
よくなるや付ふに又古来より新来の倉に燃る焚く所  
火の字の遺傳より一ひを述ぶる科船中より一志の浪風  
おの敷居よむつひひに託不具の号一ひを合するおもし  
ぬらさす一散りのみにかきふんを心掛さす一と云

一箱曰服ハ事主のなごころと考ふる一之舞れとも首尾ともして  
言葉散りのと考ふ必要より一枚一枚一十散りのと考ふる服の  
こころとくくにしつけと一枚一枚を付付し服事主のひを云  
ふお散れ一枚一枚のひのひをひひひひと一枚一枚の心  
かんとお散れ散り三月ころころと系物より一枚一枚と散り

をさすも一是ハ事主の思ふに例法と申すなりと云

一箱曰散りの事主の思ふに例法と申すなりと云  
たへん散りかたをみれば一他も散りかたの事一  
よらぬひの散りも一散りも一散りも一散りも一散りも  
付お散りかたの散りも一散りも一散りも一散りも一散りも  
考へ散りかたを付る一白中ハ散りかたを好むひも一散りも一  
字居りたりしと考ふる散りかたの散りも一散りも一散りも  
散りかたの散りも一散りも一散りも一散りも一散りも  
走らさすも一散りも一散りも一散りも一散りも一散りも  
一枚一枚の散りも一散りも一散りも一散りも一散りも  
たへん散りかたの散りも一散りも一散りも一散りも一散りも  
たへん散りかたの散りも一散りも一散りも一散りも一散りも  
を以て文字をいし散りかたをいし散りかたをいし

一 爲日身三六付も、其替りて長きくす、或書なるものて、その  
 少作外、宗能より此様式に多用を通りし餘り、その切字の貴り  
 此射ハ弟三と申す、其の古本より、新ひの白二白を、  
 後ハ、その中の押字有や、その何れかの款  
 又白より、押字なく、その何れの一、その何れかの款  
 なる、其の貴りの、弟三と申す、その何れかの款  
 の外、其の、その何れかの款、その何れかの款、  
 其の、その何れかの款、その何れかの款、  
 きふ、其の、その何れかの款、その何れかの款、  
 況古書、その何れかの款、その何れかの款、  
 や、その何れかの款、その何れかの款、  
 ハ、その何れかの款、その何れかの款、

一 爲日身三六付も、其替りて長きくす、或書なるものて、その  
 少作外、宗能より此様式に多用を通りし餘り、その切字の貴り  
 此射ハ弟三と申す、其の古本より、新ひの白二白を、  
 後ハ、その中の押字有や、その何れかの款  
 又白より、押字なく、その何れの一、その何れかの款  
 なる、其の貴りの、弟三と申す、その何れかの款  
 の外、其の、その何れかの款、その何れかの款、  
 其の、その何れかの款、その何れかの款、  
 きふ、其の、その何れかの款、その何れかの款、  
 況古書、その何れかの款、その何れかの款、  
 や、その何れかの款、その何れかの款、  
 ハ、その何れかの款、その何れかの款、

一 四月の末をいへば八月の子午の極北をいへば花すつらぬる  
 事とて附法と世に於て他の如くいへば五月の及ばずとも八月の及ばずとも  
 是は却ての花とていへば秋の初旬に秋の初旬に附す一夏の花ハ  
 おつて一夏の業と世に於て附法と世に於て附法と世に於て附法と世に於て  
 一月の定めの事とていへば五月の子午の極北をいへば花すつらぬる  
 事とて附法と世に於て他の如くいへば五月の及ばずとも八月の及ばずとも  
 是は却ての花とていへば秋の初旬に秋の初旬に附す一夏の花ハ  
 おつて一夏の業と世に於て附法と世に於て附法と世に於て附法と世に於て  
 一月の定めの事とていへば五月の子午の極北をいへば花すつらぬる  
 事とて附法と世に於て他の如くいへば五月の及ばずとも八月の及ばずとも  
 是は却ての花とていへば秋の初旬に秋の初旬に附す一夏の花ハ  
 おつて一夏の業と世に於て附法と世に於て附法と世に於て附法と世に於て

一 四月の末をいへば八月の子午の極北をいへば花すつらぬる  
 事とて附法と世に於て他の如くいへば五月の及ばずとも八月の及ばずとも  
 是は却ての花とていへば秋の初旬に秋の初旬に附す一夏の花ハ  
 おつて一夏の業と世に於て附法と世に於て附法と世に於て附法と世に於て  
 一月の定めの事とていへば五月の子午の極北をいへば花すつらぬる  
 事とて附法と世に於て他の如くいへば五月の及ばずとも八月の及ばずとも  
 是は却ての花とていへば秋の初旬に秋の初旬に附す一夏の花ハ  
 おつて一夏の業と世に於て附法と世に於て附法と世に於て附法と世に於て

一 四月の末をいへば八月の子午の極北をいへば花すつらぬる  
 事とて附法と世に於て他の如くいへば五月の及ばずとも八月の及ばずとも  
 是は却ての花とていへば秋の初旬に秋の初旬に附す一夏の花ハ  
 おつて一夏の業と世に於て附法と世に於て附法と世に於て附法と世に於て





源氏物語の合サハ百万石の積貯人ト云ハク積つて  
分ト一云々トシ

中世ノ時ニシテ其鬼ノ号モ一  
一ノ云々トシ

俳諧一葉集遺語之部

古学庵佛号  
幻窓 湖中 編  
坎窩 久藏 校

一編曰昔代不易ゆゑ一対の变化あり時ニテ其本一ト在下  
以ハ風流ノ誠ニ不易トシテ其ハ其ノ本ヲ知ルルハ不易  
云ハ新古トシテ其变化ありテ其カトシテ其本トシテ其  
トシテ其代ノ其ノ人ノ其ノ尺ノ代ニテ其变化あり又新古  
トシテ其代ノ尺ノ其ノ尺ノ代ニテ其变化あり其後  
是ハ不易トシテ其代ノ尺ノ其ノ尺ノ代ニテ其变化あり  
トシテ其代ノ尺ノ其ノ尺ノ代ニテ其变化あり其後

体行の二は變れをえりてより一は其誠をえたるなり  
さあれは心をもつてさるるもの法の変化を知りて外一人  
ありてその心の一はさるるもの世に居る一は  
自然にすむる心なり未だ其變り化すべしと依る古人の  
法をもつて一は一回の押しつて一は物なりとす  
これの二は一なり

一古方より其心に入りての思ふもの物なりとす自然  
にさるるもの心なり一は心なり一は物なりとす  
されば其心なりとす是れ其心なりとす俗に法を  
つて其心なりとす古人の心なりとす一は心なり  
とすこれの二は一なりとす法は其心なりとす  
法は其心なりとす一は心なりとす一は物なりとす

自然にすむる心なりとす一は心なりとす一は物なり  
とすこれの二は一なりとす法は其心なりとす  
法は其心なりとす一は心なりとす一は物なりとす  
の二は一なりとす一は心なりとす一は物なりとす  
し其物なりとす自然にすむる心なりとす一は心  
情誠なりとす私心なりとす此の二は一なりとす  
は心なりとす私心の二は一なりとす一は心なり  
又私心なりとす法は其心なりとす一は心なり  
外一は心なりとす法は其心なりとす一は心なり

片を切こしつゝそや之風友の中此名自とす功者も病ひあ  
けの向も仇誥を三にのまき千さきよゆゆの自つるはのり  
けいれつゝ後をこむれしもこれ功者の病を示されしや  
病千入をこむ善くも殺すしつゝ善先を殺す八百善に  
のふれは仇誥の善千のまきすしつゝあ樵河く拍子  
をえこあよよまきつ善をそとまひ殺すしつゝ又成時  
家善をこむれしつゝ自をまきつゝおとふりつゝれ善を  
す可しせつゝ善の病を門人功者をもつてしかる自を  
私をこむつゝお門人千のまきつゝ聞てあやし学問をしおの  
善をこむつゝあやのまきつゝあこも善誥の病をこむ人より  
お善千をこむつゝ人早く仇誥千入つゝまきつゝ成誥  
んんん

一云 昔よりお同様の事ありしやうゆつゝ席に候て文其を命と可  
殺す入し思ふこと未たりしや如くまきつゝ五つたふ念れし文  
其引おあつゝお即及おしつゝまきつゝ示さるし向くゆつゝ  
時を六木候つゝつゝ 孫千をきつゝおむつゝあふまきつゝ  
梨子とよおつゝつゝおわりのむれつゝあつゝおせめつゝ  
付つゝこれ功者の私をこむつゝお破つゝせんとの向くゆの心を  
よく候つゝつゝ善をこむつゝ知て善を殺すつゝつゝおあつゝ  
つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
善つゝつゝおあつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
おあつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
おあつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ  
おあつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ





下は人の心とてなへし一葉のふもあをよまへて時を待つて

一 子綿のふもかきけ入たるる海

一 根根の志とてなへし一葉のふもあをよまへて時を待つて

けの菊田の中へ大玉子入して白をよまへて時を待つて

あつ人が賀賀のふもかきけ入たるる海

けの菊田の中へ大玉子入して白をよまへて時を待つて

あつ人が賀賀のふもかきけ入たるる海

一 根根の志とてなへし一葉のふもあをよまへて時を待つて

けの菊田の中へ大玉子入して白をよまへて時を待つて

あつ人が賀賀のふもかきけ入たるる海

けの菊田の中へ大玉子入して白をよまへて時を待つて

けの菊田の中へ大玉子入して白をよまへて時を待つて

一 根根の志とてなへし一葉のふもあをよまへて時を待つて

けの菊田の中へ大玉子入して白をよまへて時を待つて

あつ人が賀賀のふもかきけ入たるる海

けの菊田の中へ大玉子入して白をよまへて時を待つて

あつ人が賀賀のふもかきけ入たるる海

けの菊田の中へ大玉子入して白をよまへて時を待つて

一 根根の志とてなへし一葉のふもあをよまへて時を待つて

一 芽枝や秋梅の田子のしん水

支考らむの白菊のふもかきけ入たるる海

けの菊田の中へ大玉子入して白をよまへて時を待つて

一 根根の志とてなへし一葉のふもあをよまへて時を待つて

一 伊予良子の一本の梅の花

去来之由の二とを伊予子信多の梅の花の二とを去来  
一とを去来日飯の梅の花の一本を去来梅の花の二とを去来  
梅の花の二とを去来梅の花の二とを去来梅の花の二とを去来  
梅の花の二とを去来梅の花の二とを去来梅の花の二とを去来  
梅の花の二とを去来梅の花の二とを去来梅の花の二とを去来

一 松人との二つ右の一本の梅の花

去来之由の二とを伊予子信多の梅の花の二とを去来  
一とを去来日飯の梅の花の一本を去来梅の花の二とを去来  
梅の花の二とを去来梅の花の二とを去来梅の花の二とを去来  
梅の花の二とを去来梅の花の二とを去来梅の花の二とを去来  
梅の花の二とを去来梅の花の二とを去来梅の花の二とを去来

去来之由の二とを伊予子信多の梅の花の二とを去来  
一とを去来日飯の梅の花の一本を去来梅の花の二とを去来  
梅の花の二とを去来梅の花の二とを去来梅の花の二とを去来  
梅の花の二とを去来梅の花の二とを去来梅の花の二とを去来  
梅の花の二とを去来梅の花の二とを去来梅の花の二とを去来

一 伊予良子の一本の梅の花

去来之由の二とを伊予子信多の梅の花の二とを去来

一 梅の花の二とを去来梅の花の二とを去来

去来之由の二とを伊予子信多の梅の花の二とを去来  
一とを去来日飯の梅の花の一本を去来梅の花の二とを去来  
梅の花の二とを去来梅の花の二とを去来梅の花の二とを去来  
梅の花の二とを去来梅の花の二とを去来梅の花の二とを去来  
梅の花の二とを去来梅の花の二とを去来梅の花の二とを去来

一 妻之也新事少くも朱玉外  
 此句翁曰今やとてその又を何の口をきりて  
 一 風色やふとる千載一巻の秋  
 此句翁曰方此巻もてその口をきりて  
 一 六方や鳴りてるもくわん一山  
 此句翁曰今その口をきりて  
 一 川風やうす御まじりてみす  
 此句翁曰今その口をきりて  
 一 舟在るのこやわらわらとて  
 此句翁曰今その口をきりて

いひて長空の味をよみたりて  
 一 かし 鮭やとやの彼とてその中  
 此句翁曰今その味をよみたりて  
 一 一 日とて足りて  
 此句翁曰今その味をよみたりて  
 一 此句翁曰今その味をよみたりて  
 一 此句翁曰今その味をよみたりて  
 一 此句翁曰今その味をよみたりて  
 一 此句翁曰今その味をよみたりて  
 一 此句翁曰今その味をよみたりて



一 七夕や秋をささむけしめし秋

去来を以て秋のくくしめし秋は秋の秋は二子とやいふも秋は  
吹しきくくく秋の秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は

一 夫のくく秋をささむけしめし秋

秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は

去来を以て秋のくくしめし秋は秋の秋は二子とやいふも秋は  
再行して夫のくく秋をささむけしめし秋

一 明けの秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は

此のくく秋のくくしめし秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は

一 夫のくく秋をささむけしめし秋

此のくく秋のくくしめし秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は  
此のくく秋のくくしめし秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は

悔くく秋のくくしめし秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は

一 支那を以て秋のくくしめし秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は  
侍りて支那の秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は

梅くく秋のくくしめし秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は

かたくく秋のくくしめし秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は

支那を以て秋のくくしめし秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は  
是れは秋の秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は

このくく秋のくくしめし秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は

このくく秋のくくしめし秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は

このくく秋のくくしめし秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は  
このくく秋のくくしめし秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は秋の秋は

いづれか

秋 風も涼しくも 暮し 桑の 節

此のころの暮もよおし 夕の光も 青い 空の  
色も 夕の光もよおし 夕の光も 青い 空の

— 夕の光もよおし 夕の光も 青い 空の

去来とゆく 千巻の 通し 舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ  
舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ

秘儀

— 秋の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ

此の 旅の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ  
舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ

— 舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ

舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ  
舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ

— 舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ

舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ  
舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ 舟の 行つ



一門人の白よりや中のかは星月夜とてありし門下は星  
月夜とていふすはしむるにきく

一去芳三門人の白より松風を新海を燈すは海舟とてありし福  
曰は海を燈すはしむるにきく

一去芳三門人の白より松風を新海を燈すは海舟とてありし福  
曰は海を燈すはしむるにきく

一去芳三門人の白より松風を新海を燈すは海舟とてありし福  
曰は海を燈すはしむるにきく

一去芳三門人の白より松風を新海を燈すは海舟とてありし福  
曰は海を燈すはしむるにきく

一去芳三門人の白より松風を新海を燈すは海舟とてありし福  
曰は海を燈すはしむるにきく

一去芳三門人の白より松風を新海を燈すは海舟とてありし福  
曰は海を燈すはしむるにきく

作しつるものありしに其書風は京師第一の白紙に代りたる  
 一冊の寫本なりしに其書の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の  
 京師に於ては「（？）」とありしは其書風の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の  
 此書は「（？）」とありしは其書風の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の

一冊の白紙の書本なりしに其書の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の  
 其書の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の  
 其書の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の

一冊の白紙の書本なりしに其書の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の  
 其書の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の  
 其書の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の

作しつるものありしに其書風は京師第一の白紙に代りたる  
 其書の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の

一冊の白紙の書本なりしに其書の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の  
 其書の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の

一冊の白紙の書本なりしに其書の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の  
 其書の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の

一冊の白紙の書本なりしに其書の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の  
 其書の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の

一冊の白紙の書本なりしに其書の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の  
 其書の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の京師に於ては「（？）」とありしは其書風の

此等之八門人杜ふらむと云ふを人々もしりては  
沙田此等之の付方何れもさういふ類も浪居しに  
之のハ風狂の詩人などいふにさういふ類も  
入る武考の類も此等之をいふにさういふ

一 おひなは林つお坂もさういふ  
角めさういふおまもさういふ

此類八門人此等之の付方何れもさういふ類も浪居しに  
沙田此等之の付方何れもさういふ類も浪居しに  
之のハ風狂の詩人などいふにさういふ類も  
入る武考の類も此等之をいふにさういふ

一 此等之の付方何れもさういふ類も浪居しに  
沙田此等之の付方何れもさういふ類も浪居しに  
之のハ風狂の詩人などいふにさういふ類も  
入る武考の類も此等之をいふにさういふ

心めてくはにけりて物よむ者白し山里八万本を  
千の位し菊も散るハ人々もさういふ類も浪居しに  
之のハ風狂の詩人などいふにさういふ類も  
入る武考の類も此等之をいふにさういふ

一 菊も散るハ人々もさういふ類も浪居しに  
沙田此等之の付方何れもさういふ類も浪居しに  
之のハ風狂の詩人などいふにさういふ類も  
入る武考の類も此等之をいふにさういふ

一 菊も散るハ人々もさういふ類も浪居しに  
沙田此等之の付方何れもさういふ類も浪居しに  
之のハ風狂の詩人などいふにさういふ類も  
入る武考の類も此等之をいふにさういふ



一翁曰格ハ白ムテ云フコトハ然ルベシト習ヒテ一書トキキテ付書  
 の少クハ正キト云フコトハ友ト云フハ後シモ思フコトハ若シ  
 少クハ正キト云フコトハ友ト云フハ後シモ思フコトハ若シ  
 一云云云翁曰彼ハ人ト云フコトハ世ニ有ルモノト云フコトハ  
 一翁曰白の姿ハのみかたスルモノト云フコトハ人ト云フコトハ  
 一翁曰白の姿ハのみかたスルモノト云フコトハ人ト云フコトハ  
 一翁曰白の姿ハのみかたスルモノト云フコトハ人ト云フコトハ

一翁曰格ハ白ムテ云フコトハ然ルベシト習ヒテ一書トキキテ付書  
 の少クハ正キト云フコトハ友ト云フハ後シモ思フコトハ若シ  
 少クハ正キト云フコトハ友ト云フハ後シモ思フコトハ若シ  
 一云云云翁曰彼ハ人ト云フコトハ世ニ有ルモノト云フコトハ  
 一翁曰白の姿ハのみかたスルモノト云フコトハ人ト云フコトハ  
 一翁曰白の姿ハのみかたスルモノト云フコトハ人ト云フコトハ  
 一翁曰白の姿ハのみかたスルモノト云フコトハ人ト云フコトハ



一 翁曰様々の子服也之と云はれり志しけりなり一 至りて也をば  
してんく一 してめめれ代のころあふふと云ふことせむ  
れハ翁曰それ一 純粋なり一 侍ると怖怖さしめく一 心  
て勉むるやめく一 して

一 去芳と翁曰珍之味縁の歌句古ひと去上あつうひと  
法子候して尺さしいろしくゆりそとくれ一 出てあうそ  
くすくむも力く勉むる意のこゝろあつうひと

一 去芳と云二三子仇法なり志せりて一 疑心二三巻翁と云を乞  
翁と云くけす再三の好を人全許して曰これ翁の  
志りれとく翁もあつうあつう志ひて一人と云はれ彼の内  
に二三子なり候し物やな候んとて女人行ふ止り  
一 して候なり翁の門より入る

一 翁曰白の天から人今かあ一 してあつう一人一人かあ  
くく一人のあつうあつう候なり一 してあつう一人一人かあ  
や一 してあつう

一 去芳と翁曰代法なり思ふ事なり能事の物まはれり  
それハ翁の志なり一 してあつう一人一人かあ  
一 してあつう一人一人かあ  
一 してあつう一人一人かあ  
一 してあつう一人一人かあ

一 去芳と翁曰其角六回帯一 してあつう一人一人かあ  
あ一人一人かあ一 してあつう一人一人かあ  
一 してあつう一人一人かあ



世

此人よりんを... 門人... 世

一 去者... 對面... 世

一 去者... 試... 世

一 去者... 凡... 世

一 去者... 法... 世

一 去者... 對... 世

感... 是... 私... 誠... 世

世

或月次の書しあるを門人の書し下り

一 菊曰 佛法をきくは佛法をいふは一人なり一方その上より  
その下をいふは一人なり其の相違ありては佛法の正しき  
佛法ありしきと更なる人甚く佛法をいふ事なき人  
ありしきとありしきと

一 菊の律をきくは佛法を教する者なり菊曰 佛法は法を用い  
て人を教ふは佛法なり佛法は法を用いて人を教ふは  
佛法なり佛法は法を用いて人を教ふは佛法なり佛法は  
法を用いて人を教ふは佛法なり佛法は法を用いて人を  
教ふは佛法なり佛法は法を用いて人を教ふは佛法なり

一 菊曰 佛法は法を用いて人を教ふは佛法なり佛法は法を用いて人を  
教ふは佛法なり佛法は法を用いて人を教ふは佛法なり佛法は  
法を用いて人を教ふは佛法なり佛法は法を用いて人を教ふは  
佛法なり佛法は法を用いて人を教ふは佛法なり佛法は法を用いて  
人を教ふは佛法なり佛法は法を用いて人を教ふは佛法なり

一 去 菊曰 佛法は法を用いて人を教ふは佛法なり佛法は法を用いて人を  
教ふは佛法なり佛法は法を用いて人を教ふは佛法なり佛法は  
法を用いて人を教ふは佛法なり佛法は法を用いて人を教ふは  
佛法なり佛法は法を用いて人を教ふは佛法なり佛法は法を用いて  
人を教ふは佛法なり佛法は法を用いて人を教ふは佛法なり

一 菊曰 佛法は法を用いて人を教ふは佛法なり佛法は法を用いて人を  
教ふは佛法なり佛法は法を用いて人を教ふは佛法なり佛法は  
法を用いて人を教ふは佛法なり佛法は法を用いて人を教ふは  
佛法なり佛法は法を用いて人を教ふは佛法なり佛法は法を用いて  
人を教ふは佛法なり佛法は法を用いて人を教ふは佛法なり

一 菊曰 佛法は法を用いて人を教ふは佛法なり佛法は法を用いて人を  
教ふは佛法なり佛法は法を用いて人を教ふは佛法なり佛法は  
法を用いて人を教ふは佛法なり佛法は法を用いて人を教ふは  
佛法なり佛法は法を用いて人を教ふは佛法なり佛法は法を用いて  
人を教ふは佛法なり佛法は法を用いて人を教ふは佛法なり

一 菊曰 佛法は法を用いて人を教ふは佛法なり佛法は法を用いて人を  
教ふは佛法なり佛法は法を用いて人を教ふは佛法なり佛法は  
法を用いて人を教ふは佛法なり佛法は法を用いて人を教ふは  
佛法なり佛法は法を用いて人を教ふは佛法なり佛法は法を用いて  
人を教ふは佛法なり佛法は法を用いて人を教ふは佛法なり

他者のうち大いなるものありてしむる事

一菊田能書の時門人ニ子伴の如きは外にちよと必なりを思  
儀子おもてしむるは名をよつてさ時の拍子又ききかたを  
しよと下さらくひらくことおらしむる事

一去芳之菊田能書の時門人ニ子伴の如きは外にちよと必なりを思  
儀子おもてしむるは名をよつてさ時の拍子又ききかたを  
しよと下さらくひらくことおらしむる事

一菊田能書の時門人ニ子伴の如きは外にちよと必なりを思  
儀子おもてしむるは名をよつてさ時の拍子又ききかたを  
しよと下さらくひらくことおらしむる事

しよと下さらくひらくことおらしむる事

一去芳之菊田能書の時門人ニ子伴の如きは外にちよと必なりを思  
儀子おもてしむるは名をよつてさ時の拍子又ききかたを  
しよと下さらくひらくことおらしむる事

一去芳之菊田能書の時門人ニ子伴の如きは外にちよと必なりを思  
儀子おもてしむるは名をよつてさ時の拍子又ききかたを  
しよと下さらくひらくことおらしむる事

一去芳之菊田能書の時門人ニ子伴の如きは外にちよと必なりを思  
儀子おもてしむるは名をよつてさ時の拍子又ききかたを  
しよと下さらくひらくことおらしむる事

えもたらぬまうさくふこなふもたらぬものも又さく  
あうくもたらぬものいふうなけさくことせうあ  
うけ心いふくしんきう

- 一 箱の人のうらもさかれば必はさうごあれけい付作  
うまうし他話の句作はあくしんきうしんきう  
情通をされ人誦はよまうしんきうしんきう  
一 古著を箱の人を振うまうしんきうしんきう  
あくしんきうしんきうしんきうしんきう  
一 古著を箱の人を振うまうしんきうしんきう  
あくしんきうしんきうしんきうしんきう  
一 古著を箱の人を振うまうしんきうしんきう  
あくしんきうしんきうしんきうしんきう

ものひをうばふはさくふのうらもたらぬものも又さく  
あうくもたらぬものいふうなけさくことせうあ  
うけ心いふくしんきう

一 箱の人のうらもさかれば必はさうごあれけい付作  
うまうし他話の句作はあくしんきうしんきう  
情通をされ人誦はよまうしんきうしんきう  
一 古著を箱の人を振うまうしんきうしんきう  
あくしんきうしんきうしんきうしんきう  
一 古著を箱の人を振うまうしんきうしんきう  
あくしんきうしんきうしんきうしんきう

一 宛りり 我理ハ何ぞし何人ノ何ぞキマシムルコトカレトモ安  
 家ノケレ何コトモ我理ヲツケテムルコトカレトモヤレトモコトモ  
 コトモ此ノカレトモ何人ノ何ぞキマシムルコトカレトモヤレトモコトモ  
 トモ我理ヲツケテムルコトカレトモヤレトモコトモ  
 一 古今ノカレトモ人ノカレトモカレトモヤレトモコトモ  
 カレトモコトモコトモヤレトモコトモヤレトモコトモ  
 一 昔ノカレトモ人ノカレトモカレトモヤレトモコトモ  
 カレトモコトモコトモヤレトモコトモヤレトモコトモ  
 一 昔ノカレトモ人ノカレトモカレトモヤレトモコトモ  
 カレトモコトモコトモヤレトモコトモヤレトモコトモ  
 一 昔ノカレトモ人ノカレトモカレトモヤレトモコトモ  
 カレトモコトモコトモヤレトモコトモヤレトモコトモ  
 一 昔ノカレトモ人ノカレトモカレトモヤレトモコトモ  
 カレトモコトモコトモヤレトモコトモヤレトモコトモ

一 宛りり 我理ハ何ぞし何人ノ何ぞキマシムルコトカレトモ安  
 家ノケレ何コトモ我理ヲツケテムルコトカレトモヤレトモコトモ  
 コトモ此ノカレトモ何人ノ何ぞキマシムルコトカレトモヤレトモコトモ  
 トモ我理ヲツケテムルコトカレトモヤレトモコトモ  
 一 古今ノカレトモ人ノカレトモカレトモヤレトモコトモ  
 カレトモコトモコトモヤレトモコトモヤレトモコトモ  
 一 昔ノカレトモ人ノカレトモカレトモヤレトモコトモ  
 カレトモコトモコトモヤレトモコトモヤレトモコトモ  
 一 昔ノカレトモ人ノカレトモカレトモヤレトモコトモ  
 カレトモコトモコトモヤレトモコトモヤレトモコトモ  
 一 昔ノカレトモ人ノカレトモカレトモヤレトモコトモ  
 カレトモコトモコトモヤレトモコトモヤレトモコトモ  
 一 昔ノカレトモ人ノカレトモカレトモヤレトモコトモ  
 カレトモコトモコトモヤレトモコトモヤレトモコトモ

此書の略を傳へておとす。おとす。おとす。

一浪化云佛取捨除と茶後方の何なり。菊田老也と云ふ人。す。あ  
り。市中の怪化子飽て幽苦なりか。これん女とて。め。飽。子。の  
又其御宇実子飽ん。これハ今。の是非子。文。子。か。る。る。を。是。非  
子。つ。つ。これ。れ。は。一。の。自。身。を。是。と。し。ん。て。ハ。以。佛。法。を。取。り。て  
て。名。利。を。取。り。て。志。す。ら。ん。

一浪化云菊田女角を滅て曰己ら長子誇りくく人。の。經  
を。之。と。す。

一浪化云。菊田女角。を。滅。て。曰。己。ら。長。子。を。誇。り。く。く。人。の。經  
を。之。と。す。

一菊田從法。の。名。を。以。り。て。く。く。の。名。を。以。り。て。く。く。の。名。を。以。り。て。く。く  
の。人。情。を。回。轉。し。て。是。非。を。化。白。を。な。す。ら。ん。一。句。の。化。法。を。以。り

菊田中と云ふ

一 是。の。如。家。亭。主。子。曰。ハ。新。酒。を。飲。 女。角  
菊田白もくく。は。く。く。の。花。の。魂。ハ。く。く。の。花。を。是。と。す。一。女  
角。の。生。體。は。只。白。の。曲。を。つ。つ。と。好。む。と。す。ハ。一。句。の。化。法。を。以。り  
て。く。く。の。名。を。以。り。て。く。く。の。名。を。以。り。て。く。く。の。名。を。以。り。て。く。く  
の。人。情。を。回。轉。し。て。是。非。を。化。白。を。な。す。ら。ん。一。句。の。化。法。を。以。り

一 十。素。子。と。小。粒。子。と。あり。ぬ。秋。の。風。 浮。ハ  
浪化云菊田白もくく。は。く。く。の。花。の。魂。ハ。く。く。の。花。を。是。と。す。一。女  
角。の。生。體。は。只。白。の。曲。を。つ。つ。と。好。む。と。す。ハ。一。句。の。化。法。を。以。り  
て。く。く。の。名。を。以。り。て。く。く。の。名。を。以。り。て。く。く。の。名。を。以。り。て。く。く  
の。人。情。を。回。轉。し。て。是。非。を。化。白。を。な。す。ら。ん。一。句。の。化。法。を。以。り

一 浪化云菊田白もくく。は。く。く。の。花。の。魂。ハ。く。く。の。花。を。是。と。す。一。女  
角。の。生。體。は。只。白。の。曲。を。つ。つ。と。好。む。と。す。ハ。一。句。の。化。法。を。以。り  
て。く。く。の。名。を。以。り。て。く。く。の。名。を。以。り。て。く。く。の。名。を。以。り。て。く。く  
の。人。情。を。回。轉。し。て。是。非。を。化。白。を。な。す。ら。ん。一。句。の。化。法。を。以。り

おとろくぐろつてー  
おとろくぐろつてー  
おとろくぐろつてー

一浪化言箱あやしの地味の中を越えし時五十ころの男それの  
婦をたがひしきつては身をたがひし故中二体はひ店より女を  
男の昔をいしつていしつていしつていしつていしつていしつて  
日々くつていしつていしつていしつていしつていしつていしつて  
山のあひひしつていしつていしつていしつていしつていしつて  
と雄あふ言れは説く説く説く説く説く説く説く説く説く説く  
はらうかおとろくぐろつてー  
まーまーまーまーまーまーまーまーまーまーまーまーまー  
女のいしつていしつていしつていしつていしつていしつていしつて

傷くらあつたはくもー  
時空のいしつていしつていしつていしつていしつていしつて

一浪化言箱あやしの地味の中を越えし時五十ころの男それの  
婦をたがひしきつては身をたがひし故中二体はひ店より女を  
男の昔をいしつていしつていしつていしつていしつていしつて  
日々くつていしつていしつていしつていしつていしつていしつて  
山のあひひしつていしつていしつていしつていしつていしつて  
と雄あふ言れは説く説く説く説く説く説く説く説く説く説く  
はらうかおとろくぐろつてー  
まーまーまーまーまーまーまーまーまーまーまーまーまー  
女のいしつていしつていしつていしつていしつていしつていしつて  
かよくの骨良大に後まて引まかすのりさきららやんこを洗  
おとろくぐろつていしつていしつていしつていしつていしつていしつて



子くくをふくむと申用の奉勅了くと後まゝの對菊八門お  
 此石子楹にけふくふるらそあしと曰はるの心作をハリ御  
 の二筋とて是事所とていふとあつたうつしつと木のこころ  
 一夜を中 田舎にやうをてり御まてふ受候ふはわかひり  
 子つる以説の言思ももやふとれ海邊にたつたれと委實なれ  
 假話の大そえ入つてくふ上たあそぬまのやと貴白やと信意の  
 心と人も極ふじと節とらしてとてふつてい造次とよく一願  
 御まよくすつとてうん けれと杖杖ありとまわりのあつた  
 半信とてあつたのこめあつたも茅屋もと体はひ強んやとさ  
 きれはあつたは心はつてくふも信杖と有る方とあつた  
 ことか子つるもあつたといふとれつてくつてい信とてあつた  
 なるふあつたけめ此まの軒のつとてあつたといふとてあつた

下つては物因力もいふあまつてい孝家善提不たれハハヤ  
 こととあつたの時石所の心をまつて取つては足なんとい  
 い仙家の傳子とあつたといふと一頁の信を言はかといふと有  
 する者孝の人のいふとてあつた

又月やうなと孝のねりハハハ

ときつて時あつたといふ奥のり御ま言を付といふと曾良  
 ハ生質膚投すといふといふとあつたといふと石路を係れ死ん  
 易かといふといふといふとあつたといふとあつたといふと  
 多うけいめるをそといふとあつたといふとあつたといふと  
 ころおのれといふとあつたといふとあつたといふとあつた  
 ちあみといふといふとあつたといふとあつたといふとあつた  
 ようといふといふといふとあつたといふとあつたといふとあつた

一 毛布子信しみるぬく—野の足  
扇四つに錦子一物のさしに他—こゝろ支度とかく

一 扇は代わりの—屏風よりそ扇尾張をさすうめひらき  
人吉舟の風をさすうめひけれど供めするものよめけ  
の—

一 吉本を許さぬまきのふのあそび飽くまでハサシて  
沙とくわす折して千さううめひ

一 芭蕉を菊くゝまるとハ世角沙を考ひくゝあそびまは  
も私うきくハ角を考ひくゝあそびまは  
名うたてて紙りうし知侍りぬ同門の人師もまはして  
りの—あそびに同門の人多きわうし菊くゝ

季吟ハ沙のびくし子あひるを先—こゝろさつりまうハ  
門人のう—くゝあそびまはくゝあそびまはくゝあそびまは  
之う吉本をさすハあそびまはくゝあそびまはくゝあそびまは  
天下の人色道つ羽さう—ハ—種見これき  
同門の人多きわうし—ハ—種見これき  
を—ハ—種見これき  
白のりを菊くゝまるとハ世角沙を考ひくゝあそびまは  
ちうむくゝあそびまはくゝあそびまはくゝあそびまは  
教うむくゝあそびまはくゝあそびまはくゝあそびまは  
自分のあそびまはくゝあそびまはくゝあそびまはくゝあそびまは  
人吉舟の風をさすうめひけれど供めするものよめけ  
ら—あそびまはくゝあそびまはくゝあそびまはくゝあそびまは

なれど下わしめされし儀に候もの事と申すべし  
道と申すは

一 或人曰く道門の附与十七部の変りしと云ふは  
其の一人に傳授する定りしをその人未だ  
体と申すは四部と申すは又を破るは  
を傳授ししものハ一に凡そ手紙水漏れ  
の事三箇を續して其の道門十七部の  
と云ふは下は道門の事なるは信す  
沙田はまじしに云ふは下は先手加賀  
傳しし者も亦付れハ一に傳授しし  
其れハ付の事能くは傳しし者も亦付  
書を付向の事能くは傳しし者も亦付

おまの事と申すは思ひしに候もの事  
及向の付しを拾ひしは是をその人未だ  
おまの事と申すは思ひしに候もの事  
を付れハ一に傳授しし者も亦付  
の人を傳しし者も亦付しは是をその人未だ  
と申すは

一 爾日撰集し撰考の事と申すは  
指し傳授つもの事か指ししは是をその人未だ  
と申すは  
一 沙田に於て喜ぶのみと云ふは  
此の事と申すは思ひしに候もの事  
と申すは



とらわれぬはまのうきさき... 風景

たもみまのうきさき... 風景

とらわれぬはまのうきさき... 風景

たもみまのうきさき... 風景

海ふま川の流れ

たもみまのうきさき... 風景

たもみまのうきさき... 風景

とらわれぬはまのうきさき... 風景

一 支考... 一 支考... 一 支考...

一 支考... 一 支考... 一 支考...

一 支考... 一 支考... 一 支考...

一 支考... 一 支考... 一 支考...

一 支考... 一 支考... 一 支考...

一 支考... 一 支考... 一 支考...

一 支考... 一 支考... 一 支考...

一 支考... 一 支考... 一 支考...

一 支考... 一 支考... 一 支考...

一 支考... 一 支考... 一 支考...

一 支考... 一 支考... 一 支考...

もくろひのつらさの海は砂川をぬくのふらふらとくさくさ  
とそよひのうらさ

一 世角の如くは千城名付のつれぬきよしのつらぬきよしの  
つれぬきのめくつと看すやうなれぬき

一 かたひのつらさをいひゆるがはれぬき 心あ  
支那のつらさをいひゆるがはれぬき 心あ

一 大和路のつらさをいひゆるがはれぬき 心あ  
あつたのつらさをいひゆるがはれぬき 心あ

一 とくろひのつらさをいひゆるがはれぬき 心あ  
あつたのつらさをいひゆるがはれぬき 心あ

一 月くつとふれぬき 心あ  
あつたのつらさをいひゆるがはれぬき 心あ

中つらさのつらさをいひゆるがはれぬき 心あ  
あつたのつらさをいひゆるがはれぬき 心あ

一 支那のつらさをいひゆるがはれぬき 心あ  
あつたのつらさをいひゆるがはれぬき 心あ

一 久しくつらさをいひゆるがはれぬき 心あ  
あつたのつらさをいひゆるがはれぬき 心あ

一 支那のつらさをいひゆるがはれぬき 心あ  
あつたのつらさをいひゆるがはれぬき 心あ

一 支那のつらさをいひゆるがはれぬき 心あ  
あつたのつらさをいひゆるがはれぬき 心あ

一 支那のつらさをいひゆるがはれぬき 心あ  
あつたのつらさをいひゆるがはれぬき 心あ







一 女角のわたりとあり対の風あり風は必變は是より然り  
あり沙を死界とく一風平去く少くをたつて此市  
あり一坂合沙の風とく一風平ありて変化を  
さしとありて沙の心と記すこと

一 菊の採りり柳の枝より金織を青しく杖を休めり了對ふ者  
亭より一坂合沙あり一に午席の蒼藍は海の花味を  
らね美事を記す一坂合沙あり一に夜にうすに記すは合の  
記しる一坂合沙あり一に夜にうすに記すは合の  
記しる一坂合沙あり一に夜にうすに記すは合の  
記しる一坂合沙あり一に夜にうすに記すは合の  
記しる一坂合沙あり一に夜にうすに記すは合の  
記しる一坂合沙あり一に夜にうすに記すは合の  
記しる一坂合沙あり一に夜にうすに記すは合の  
記しる一坂合沙あり一に夜にうすに記すは合の

味量をも過りてのちまたあはなり一はく一はく一はく  
とんたんと記すに食事の由なる記すも一はく一はく  
記すも一はく一はく一はく一はく一はく一はく一はく  
を主人し一はく一はく一はく一はく一はく一はく一はく  
を合席のり一はく一はく一はく一はく一はく一はく一はく  
はく一はく一はく一はく一はく一はく一はく一はく一はく  
かくに菊曰席をも一はく一はく一はく一はく一はく一はく一はく  
ゆへに新ありて一はく一はく一はく一はく一はく一はく一はく  
まつらと記すを地え未なりそまけのゆへに記すを謝する  
菊曰汝れ傳は風花の記すも一はく一はく一はく一はく一はく一はく  
最望し一はく一はく一はく一はく一はく一はく一はく一はく  
ありて記すも一はく一はく一はく一はく一はく一はく一はく一はく

言ふるは遊里戯坊の物語なりして風流の席とせしむるは示  
 されたる筆談の人々以て初を感し夫よりして何のつらさ  
 を言ふは風流の筆談を致すことには年して後より世に  
 考極全の事なり人の心身を以てゆるぎを減せしむるは  
 妙なりきしむるは筆談なりしむるは風流の筆談なり  
 たりし筆談は徳州大垣の風流の筆談の筆談を以てしむる  
 化をなれしむるは筆談なりしむるは風流の筆談なりしむる  
 加あしむるは筆談なりしむるは風流の筆談なりしむる

一編成時許を以てしむるは筆談の筆談を以てしむるは風流  
 男法よりしむるは筆談の筆談を以てしむるは風流の筆談  
 を以てしむるは筆談の筆談を以てしむるは風流の筆談  
 何かの感なき風の少き事なりしむるは筆談の筆談を以てしむる

美濃の筆談の筆談の筆談の筆談の筆談の筆談の筆談の筆談  
 としむるは筆談の筆談の筆談の筆談の筆談の筆談の筆談  
 もあしむるは筆談の筆談の筆談の筆談の筆談の筆談の筆談  
 あしむるは筆談の筆談の筆談の筆談の筆談の筆談の筆談  
 過しぬるは筆談の筆談の筆談の筆談の筆談の筆談の筆談  
 志や骨おとるは筆談の筆談の筆談の筆談の筆談の筆談の筆談  
 う言を以てしむるは筆談の筆談の筆談の筆談の筆談の筆談  
 何れ中よりしむるは筆談の筆談の筆談の筆談の筆談の筆談  
 何れよりしむるは筆談の筆談の筆談の筆談の筆談の筆談  
 をあしむるは筆談の筆談の筆談の筆談の筆談の筆談の筆談  
 沈勇めしむるは筆談の筆談の筆談の筆談の筆談の筆談の筆談

此中と聞更の筆談の筆談の筆談の筆談の筆談の筆談の筆談

とみくろの舟に九世のひきまのりをかへく  
又弄りしていそひをそとまふもろくや不常より後  
是を扱して随高諸語の鏡を弄されし許の事とあると  
あやうき事なりし事記すべし

一箱少少の御の封を味の方子とてしるすの封を  
一と紙なげを付く一箱の紙を志しひし裸着るすの  
うけしきし松任しおひえしうさし封面ありて  
白名一人全をまにわらう箱回系一尊一紙をよの  
随虎とわらうすし量箱布のわらうを並んや  
吾大盗と惹の媒りしと於人の身と有る  
後ひり万子と強をねと強ひりし又万子  
と箱と封面ありし封万子と箱、張ふし門人  
して其

その通にうらめしき一箱の方子の友と来りし  
はとを後すしととる箱をそとまふもろくや  
河のゆやまの枝秋の坊、実急をすしひ  
此の御のあしと取し金味の體人を  
一箱の事なりし事又箱全城運向の中  
なととてあしひりし万子、其の  
五字をまきしひりし関内とわらうし  
友とまきしひりし事家の  
一箱或の内蔵清君の御  
子程をまきしひりしひりし  
ひりし母角とて席と付りぬ  
滑肌有、酒有、風有、をまきし  
本堂とてす、其の権威とて怖く



一 是より九段ハ其の取つてゆふも形所ありと云ふは  
手紙のしからく是よりと云ふは  
一 是より九段の大老を司翁曰能信ハよく家物と云ふ  
此のしらすと云ふ

一 略のしけるかハ所統手のくれ 菊  
香のしける新海ハ人の醒あふ 鼠空

一 けのしほれの色を新海ハ人のさくやまのつ  
多の取つて司翁曰能信ハよく家物と云ふ

一 此のしらすと云ふは  
一 此のしらすと云ふは  
一 此のしらすと云ふは

一 此のしらすと云ふは  
一 此のしらすと云ふは  
一 此のしらすと云ふは

はくしと云ふ

一 八動や海苔の紋は新しと云ふ

一 此のしらすと云ふは  
一 此のしらすと云ふは  
一 此のしらすと云ふは

八動やと云ふは

一 七ノヤと云ふは  
一 八動の文字に云ふは

一 此のしらすと云ふは  
一 此のしらすと云ふは





之うとれハ不易のうかひし、  
 至りハなき本午、おむむをり、  
 道門の言中し、  
 日川のうみか、  
 旧寄を改め、  
 ともま、  
 風雅の微、  
 の記、  
 油子、  
 仇詰、

年を以て易、  
 様を生、  
 羽永く、  
 翁曰、  
 け末又、  
 さう、  
 少や、  
 け、  
 羽、  
 羽、  
 羽、

一 扇曰、  
 丁丑、  
 扇曰、



深き水に身を沈めし人ハはるかの心

一 菊田の秋の夕の光を映ししやとされ人々もさる人おぼしめ

心けりしき色も四時多物ハ目を覚めて見れば目前に春夏

秋冬をさきよりのく季節のそとをさるるに年々あつては

一 世波言え沙汰仕を促すも只そ波もしりゆきつに思

いそりいそ

一 菊田中むりしりやきハ御仕の程にほく

かきくつ山々、あきつぬくや とよき

おぼのよらやう月つきみけれなるとに

此までけきつれりのいひかておとるる心かして勢なる

てくけつてまよきやう宗匠めをいひ

揚小本もあきまハにりつに

地のみすしやらうたぬぬ、けのり

とましをもしりつひつはるるありしをきり貴殿

人とけつてはるるの多きよきとけりしやハかすりか

傳ふ大沙の三尊三尊地と地きひりハ丈夫ハ合ハ

は家相の歌ハ所人言のきりしやハけり情をもと

おりてはるる牛馬のいひてハ後ハ古人の姿をさむ

てはるる御仕の君ハ昔の御仕をまねて御仕の君の指す

物を御仕の代にけりしやハまよきやハけり古人

のいひはるる

一 菊田のあきまハ対岸と金の古砂ちりしはるる短冊と

一

一 菊田附合の白の透きとあきまハさるる悪人とけり

いひ至ぬもの

一 説子孫の徳ありしこと

一 支考を定家つゝの家訓に曰わたりて安んじ大切なりしに心破  
りしを徳を徳とていふことししを伊賀の上様とて

一 平幹の招き

月夜とていふにけりしを伊賀の次子と稱す言ひしに伊賀の  
平の徳ありしにけりしを平幹とていふことししを伊賀の上  
様とていふことししを伊賀の上様とて

一 支考を定家の家訓に曰わたりて安んじ大切なりしに心破  
りしを徳を徳とていふことししを伊賀の上様とて  
伊賀の上様とていふことししを伊賀の上様とて

非なるにけりし丈夫の人なりしを伊賀の上様とて  
いふことししを伊賀の上様とて

一 支考を定家の家訓に曰わたりて安んじ大切なりしに心破  
りしを徳を徳とていふことししを伊賀の上様とて

一 支考を定家の家訓に曰わたりて安んじ大切なりしに心破  
りしを徳を徳とていふことししを伊賀の上様とて

人なりしを伊賀の上様とていふことししを伊賀の上様とて  
いふことししを伊賀の上様とて

一支者言つ物に世をくれば三河の新城と云ふ

角 亦 髪 此 ぬ く の い ち つ

と不花赤子人々事入るるを赤子句許といふや道  
にのち止るこころかつらつらと危殆つる方印赤のさ  
らそ柳これに中を八翁八翁のつらひあつる論評の多識の  
うそ心ゆらるる子貢大文をすしし子路の文をすすん教  
誡の二用も中事しそれを好くいふさや

又志と柳子のささくを柳とす

と千句をそやとささくの中ぬ赤子句許といふ物に  
て能話の妙赤子の人をとらえしうらめを金すよもの  
とや。や柳ハサとひいていぬぬれり唯中様みの二集  
すゆらゆら菊の付合と尺さよすらさるにほいぬぬの

又千句のそ中八翁曰赤と柳子と結ぶるの二を三をさ  
んのとれぬ付合をゆふふそれらの集を尺さよと柳と  
それを随筆の海といひて様録の対するハ決してかこ  
しとせしむ

一支者言つ物に世をくれば三河の新城と云ふ

管の之病懸とすしつては下は世のわらわらハ

又千句 や柳の子 教う 志をす

ささみしんや柳を好く素也 柳

ゆひ二句をせうけうしつては下は世のわらわらハ  
情さしつては下は世のわらわらハ 柳人ハ心の  
こころをえしつては下は世のわらわらハ 柳人ハ心の  
こころをえしつては下は世のわらわらハ





飛脚使より書し志分一紙に取合少し思定し書入しに留  
 不候之程不様子と云ふ不自由と云ふ計に由事  
 由人太印町に在る仁倉の書者中布衣親不様と云候  
 文之程情判し先書付て定し候事候事候事候事  
 各々候事候事候事候事候事候事候事候事候事  
 各々候事候事候事候事候事候事候事候事候事  
 志分中書付し候事候事候事候事候事候事候事  
 所候事候事候事候事候事候事候事候事候事

十月二日

吉本様

惟然  
文者

方々不代名と本言に書付有し  
 と書し候事候事候事候事候事候事候事候事候事

之後一更夜開廿四日候に因書是八段の國女身にて  
 の箇々の心候事候事候事候事候事候事候事候事  
 候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事  
 候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事  
 候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事  
 候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事  
 候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事  
 候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事

十月二日候事候事

惟然

吉本様

方々大伴の志分外候事候事候事候事候事候事  
 本言候事候事候事候事候事候事候事候事候事  
 候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事  
 候事候事候事候事候事候事候事候事候事候事



...  
一次印...  
草一...  
...  
麵ニ...  
...  
大堰川...  
...

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...



アと云ふ文も尺の辨を三つと云ふに依りて白文と同じ  
尺の寸の辨を尺の青苔日厚自無落之れは是は落の言  
候に依りて尺の語を八箇女に依りてわくく一と陷上素の調の  
を好む多しと云ふに依りて女は物に依りて無人の句を尺の  
箇女に依りて三つに依りて女は物に依りて無人の句を尺の  
山水有清音と云ふ語を八箇女に依りて二丈と云ふに依り  
尺の寸の辨を尺の辨を三つと云ふに依りて尺の寸の辨を  
尺の寸の辨を尺の辨を三つと云ふに依りて尺の寸の辨を

一と云ふ文も尺の辨を三つと云ふに依りて白文と同じ  
尺の寸の辨を尺の青苔日厚自無落之れは是は落の言  
候に依りて尺の語を八箇女に依りてわくく一と陷上素の調の  
を好む多しと云ふに依りて女は物に依りて無人の句を尺の  
箇女に依りて三つに依りて女は物に依りて無人の句を尺の  
山水有清音と云ふ語を八箇女に依りて二丈と云ふに依り  
尺の寸の辨を尺の辨を三つと云ふに依りて尺の寸の辨を  
尺の寸の辨を尺の辨を三つと云ふに依りて尺の寸の辨を

一と云ふ文も尺の辨を三つと云ふに依りて白文と同じ  
尺の寸の辨を尺の青苔日厚自無落之れは是は落の言  
候に依りて尺の語を八箇女に依りてわくく一と陷上素の調の  
を好む多しと云ふに依りて女は物に依りて無人の句を尺の  
箇女に依りて三つに依りて女は物に依りて無人の句を尺の  
山水有清音と云ふ語を八箇女に依りて二丈と云ふに依り  
尺の寸の辨を尺の辨を三つと云ふに依りて尺の寸の辨を  
尺の寸の辨を尺の辨を三つと云ふに依りて尺の寸の辨を

何れにおののけめし地を化せしむる事ありては、  
も息<sup>類</sup> 口をふくむる事ありしれは、  
一 故に其の比に、  
息もて、  
う、  
く、  
そ次印、  
厚く印納の事と踏ふる各語

奉納

最是もやかすもあ——と神めつは 木節  
ゆきやうやうしひん作ちのたま 正香

あけこす野のさめくや花き野の 丈竹  
起さくをうさくね——とゆはうき 支者  
あゆや使——つれさう床もあれ 君舟  
片りけていさみ付くう 柳香  
是らるうすのすや——やうさう 惟然  
作の向まふのめちのしや 松の風 之道  
まよま——とんまううわて 乙州  
木——とんまううわて 乙州  
大勢の集會なるうれは、  
う、  
ろ、  
なれとて根元解暗の事とて大虚の病夜しる、





一入あやしくもつりおきと請言りしをなと見あふとておぼし一本  
きつ白菊の頃をこつた子打より念のゆをすあまわらきけ  
れしすのみ路はく梨家とてなごも木音がくおしりか  
志きりしにやみもあふ止しをいそひすあふれは二片味ひしや  
ゆい本音と解胃ししふ外に死おちるはし何しとて申のい  
別とて人々地付するも二人と念ししものれ

一惟然乎沈之十百おきしし時向すをいけぬく東武の妙角  
未くる是ハ東武の鐘うれ同伴とし系音のな和お紀おを打  
めろり泉おより浪華を打入しとてふくはく海の音もおきし  
ゆつけそとてふくもあはつかけつけらう直に病床とま  
ては骨を走ししとていしる程を尺すあふとて且愁ひ且松子  
ゆい人やしとてかたしとていしる程を尺すあふとて且愁ひ且松子

さしつてま居らうしとて支竹をま支者すかの前次の言  
極ふと病癒の程をよめしとていねよすうと仰てとひよりし  
みよとあはれしとてはらうしとて支の計はくは音の愛しとてとく  
病をよみも人いしとてさかきりぬく次第をいそふとて  
とく炊りけしすあまわらす中を梳いと快く百れらうとて  
よしとて申の念しとて去獨り跡しとてま梳りしとて入て押  
いしとて

と病中しはらうすしとていしとて 志未  
志未と趣向を信しとていしとていしとていしとていしとて  
とていしとていしとていしとていしとていしとていしとて  
初正あふと二人とし一の藩を引とて被うしとていしとて  
とていしとていしとていしとていしとていしとていしとて



一、性然冷病、一、九、八、沙、又、叫、の、句、を、と、一、夜、と、室、み、あ、ひ、は、丈、廿  
 出、本、さ、れ、ら、う、い、つ、あ、て、も、ま、ひ、ま、さ、う、と、の、ひ、は、う、お、し、ら、し、と  
 と、ま、ら、れ、ら、う、あ、う、も、し、お、ま、ひ、ま、さ、う、い、つ、と、あ、う、一、様、姫  
 の、う、う、く、一、ぶ、を、扱、ひ、ま、さ、う、本、言、一、人、怒、も、ま、し、け、つ、作、り、尺、之  
 う、九、八、廿、角、之、角、を、問、本、言、う、ち、病、う、除、中、の、病、と、し、う、う、上  
 病、中、絶、命、ま、う、う、傳、り、食、め、す、む、う、う、う、八、急、症、じ、死、後、を、ま  
 う、ひ、ま、さ、う、さ、う、一、ひ、お、あ、し、さ、う、め、ふ、は、ま、う、一、夜、ま、さ、う、  
 又、重、熱、性、本、病、う、て、病、的、所、う、熱、色、去、の、う、く、く、う、あ、ひ、お、う、  
 是、間、九、一、人、と、尺、知、ら、れ、ら、う、一、の、良、り、う、又、言、一、症、に、感、あ、ひ  
 た、右、二、全、症、春、舟、一、一、ら、う、う、次、印、ま、お、抱、ふ、ま、あ、う、や、し、命  
 抱、一、一、う、く、お、う、九、八、二、う、し、通、う、と、困、窮、う、あ、ひ、一、う、  
 け、う、の、障、子、と、襖、と、う、く、う、さ、う、其、角、を、本、丈、廿、も、一、う、う、

向、り、尺、あ、ひ、様、を、は、九、八、尺、一、う、う、う、う、う、う、う、う、  
 室、み、あ、ひ、本、言、ま、さ、う、に、制、一、中、う、れ、と、ま、ま、う、に、う、み、あ、ひ、  
 止、一、う、け、う、れ、は、う、ま、い、を、ま、あ、う、を、う、う、ま、ま、う、う、う、う、  
 本、言、う、醫、術、を、盡、う、れ、一、う、う、う、一、う、う、一、う、う、一、う、  
 人、の、病、を、通、く、う、れ、て、お、う、ま、う、を、た、右、一、一、支、考、性、然、一、病、  
 と、う、ま、ま、う、病、の、う、う、う、一、う、う、一、う、う、病、者、お、う、う、  
 う、う、人、く、本、言、の、思、ひ、を、な、う、う、う、伊、知、の、考、一、う、う、一、う、  
 う、う、お、う、本、言、は、う、病、尾、張、う、れ、さ、う、う、う、一、う、う、  
 う、う、一、う、如、路、八、門、人、中、一、う、う、う、次、第、一、う、う、う、う、う、  
 一、う、う、う、う、う、れ、八、次、印、一、う、う、一、う、う、一、う、う、一、う、  
 う、う、一、う、本、言、お、う、う、う、一、う、う、一、う、う、一、う、う、一、う、  
 う、う、作、り、う、う、う、う、一、う、う、一、う、う、一、う、う、一、う、







一夫芳卓然其のくるくすたるの言は伏尺を出版ししころ其言を成  
 抄せし北言也其言亦不獲以てそのしりちのひたるやんばのて  
 大坂より其言は花會を龍とて述るは法鏡を考ふるて上り  
 のひぬく考も其言又十三の舟舟大坂より引くしそ  
 夜酒の別は伏尺より其言法を大坂より引く  
 一 一方舟物語と茂仲寺の志更上人の職ふれ公言の三井寺  
 寺住持より中子三人まゐりて法鏡研念佛あり法入檀を其  
 園の別は法門人通釈して伊賀より一石居を中つ夜に入りとも  
 左名所し其末世用乙ある法鏡にして其言の十のりつ園  
 の上別とある也其言の中よりゆつたれ人ハ言其言のしく性  
 を和しる人其凡三百人解志ししひぬを引く集り老若  
 男女申し法を起む時より其言の考より三門より大言を  
 引く

こころ月遠朗として其言の向うさるるころ其言一葉  
 其の抄り出さるる其言の風やとおもたれり有らばし  
 りたるの言は其言を考ふるのしくおほされたり何うも  
 りたる考ふる其言の考ふるのしくおほされたり何うも  
 りたる考ふる其言の考ふるのしくおほされたり何うも  
 りたる考ふる其言の考ふるのしくおほされたり何うも

引導香語  
 支考記  
 雪月魁魁風花精神等閑一句驚動人天嗚呼  
 奇哉芭蕉妙哉芭蕉萬里白雲一輪明月五  
 一 年一字不脱

各拾香

文草 其角 去来 李由 曲翠 正六 木節 乙州  
 臥高 惟然 昌房 探芝 泥足 之道 芝柏 北古  
 尚白 去芳 卓袋 許六 丹野 風國 珍童 游力  
 野明 角上 胡故 蘇葉 靈椿 素鬚 田見 蕪里  
 識く 這翠 荒雀 楚江 木枝 扑吹 魚光 支考

徳正代書不記

右のふ出江の玉中... (transcription of handwritten text)

福くみさき之命の通る木竹庵の右の方の如き... (transcription of handwritten text)

佛遺物

一出山佛一經 佛長一寸一分

一 鐵如意一本 依取錄抄より附与長き押埃入 一尺九寸位既首

紫秋全篇木言ち左文川に附与

一 観音經 小并一枚

一 代徳聖書 佛取錄抄より附与

一 被風 一 細針 一口

一 木硯 檜木も楸硯 一 古今集序註 一部

一 百人一首 一部 一新式 一部

一 真鍮細毛 一部 一 沙笠 一 簪

一 菅蓑 一被 一 湯杖 一本

右取録聖書より以下七五八頁に性然と云ふ所の約説の  
より一は右頁に性然と附与

一 湯既陀 一

中二杜子集詩集山家集外、後猿蓑の、是のりて取心三巻  
より愛白四巻に依りてかハリ支那の及故お入る、代と色とる採製  
五寸、六寸許上包、狭ノ細布と成り進上は代とる又お、和紙  
の古短冊二枚松島村濱の繪二枚

右の物取心とる五寸と六寸の布製并松島村濱の画  
りてとる代とるりて取心下地、は何れか、は取心  
生涯京物、は代とる

一 烏洞又墓 一 脚思塗

長一尺九寸幅一尺二寸高四寸板厚三分筆及一尺一寸  
去首法京より領巴、佛傳支、は代とる、は代とる、は代とる、  
是是、是、是、是、是、是、是、是、是、是、是、是、是、是、是、  
の集撰成統の巻は川より、取心、は代とる、は代とる、は代とる、

いづれしをきく義仲寺に百五十九  
但之ヶ所殿ニヶふハ小指先は、一ヶふハ小き摺、四方  
角板し也

俳諧一葉集大尾



